様　式　C－19、F－19－1、Z－19　(共通)

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 29 年　6 月　7 日現在

機関番号：３３９１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2016
課題番号：２４５０１２７２

研究課題名（和文）博物館学史の方法論に関する研究－アメリカの博物館学思想受容過程における双方向性－

研究課題名（英文）Study on Methodology of History of Museum Studies

研究代表者
財部　香枝（TAKARABE, Kae）
中部大学・国際関係学部・教授
研究者番号：００４２１２５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,200,000円

研究成果の概要（和文）：従来の幕末・明治初期の日本の西洋博物館受容過程に関する研究は、概して、日本の西洋、とりわけヨーロッパの博物館との出会いやそれらの博物館の認識といった一方向の受容過程として探究される傾向が見られた。
こうした中、本研究は、議論の余地を残すアメリカの博物館や博物館学の受容過程を主題とした。受容研究を行う際、受容する側のみならず、受容をもたらす側の状況を正確に把握することが不可欠である点に留意した。さらに、それらがアメリカの博物館学界に与えた影響をも視野に入れ、双方向の影響を検討した。
研究成果は、学会誌、学会、公衆向けセミナーにて公表した。

研究成果の概要（英文）：In preceding studies, the process of receiving Western museums in the End of the Edo period and the early Meiji era had a tendency to be explored as one way, such as Japanese encountering the museums in the west, especially in Europe, and Japanese recognizing those museums. Under these circumstances, this research focuses on the process of receiving American museums and museum studies, which leaves room for discussion. It is essential to grasp accurately the situation of not only a recipient side but also a sender side which affects the recipient side. This research also explores the interaction between the Japanese museum academia and the American museum one. The results of this study have been presented at conferences and have appeared in journals.

研究分野：科学史、博物館学

キーワード：博物館学　科学史　スミソニアン協会　博物館　科学博物館

１．研究開始当初の背景
(1) 博物館学史は博物館学の体系構築の基盤ともなりうるものであり、その方法論は博物館学界で議論すべき喫緊の課題の一つである。しかしながら、博物館史については、椎名仙卓や博物館史研究会をはじめとして研究が蓄積されてきた一方、博物館学史の蓄積はいまだ不十分と言わざるを得ない状況にある。こうした中、博物館学史の一端を補完すべく、博物館学意識を有した研究者の博物館学思想の検証が始まったところである（青木豊・矢島國雄編『博物館人物史』上、雄山閣、2010)。

(2) 研究代表者はこれまで、日本の博物館草創期におけるアメリカの博物館の影響に着目し、スミソニアン協会博物館の受容過程を探究してきた。一方、[伊藤]圭介文書研究会に所属し、『伊藤圭介日記』の解読・刊行を進めてきたほか、その生涯・博物館との関わり・研究の軌跡などを検討し、博物館学の視点から論述してきた。

２．研究の目的
(1) 本研究は、幕末から明治初期にかけての日本の西洋博物館受容過程を検討するものである。山本哲の類型によれば、博物館学の前史（1860 以前：博物館との出会い)、胎動期（1860-1872：博物館の認識)、黎明期（1872-1911：博物館の誕生と理論化）として位置づけられる時代を取り扱う。概して当該期の研究は、日本の西洋、とりわけヨーロッパの博物館との出会いやそれらの博物館の認識といった一方向の受容過程として研究される傾向が見られる。

(2)こうした中、本研究は、議論の余地を残すアメリカの博物館や博物館学の受容過程を主題として取り上げる。具体的には、スミソニアン協会や御雇米国人を題材とする。受容研究を行う際、受容する側のみならず、受容をもたらす側の状況を正確に把握することが不可欠である点に留意する。さらに、一方向の受容過程の研究を超克し、それらがアメリカの博物館学界に与えた影響をも視野に入れ、双方向の影響を検討する。研究資料は、スミソニアン協会を中心とする在米機関所蔵の未紹介資料(文献、標本)を利用する。

３．研究の方法
(1) スミソニアン協会初代長官ジョセフ・ヘンリーJoseph Henry および開拓使や札幌農学校の御雇米国人たちの博物館学思想に関する先行研究の文献調査を行う。

(2) 毎夏、ワシントン DC のスミソニアン協会アーカイブスおよびメリーランド州カレッジパークの国立公文書記録管理局にて現地調査を実施する。

(3) 毎月、名古屋市東山植物園にて開催される[伊藤]圭介文書研究会に出席し、『伊藤圭介日記』の中の幕末・明治初期の博物館を巡る動きを確認する。

(4) 博物館学史の方法論、とりわけオーラル・ヒストリーの活用について、スミソニアン協会アーカイブス、協会史部研究者と意見交換を行う。

４．研究成果
(1) 1858 年に特許局からスミソニアン協会へのコレクション移転に伴って移動したヴァーデン Varden の日記が、スミソニアン協会アーカイブスに所蔵されている。これは、スミソニアン協会の最初期の博物館管理者の日記である。それまで日本に未紹介であった本日記を詳細に調査し、当時の博物館の状況および万延元年遣米使節団等に関する記述を明らかにした。

(2) スミソニアン気象事業は、当初は博物学研究の推進を標榜していなかったが、実際には博物学研究も行われた（後述５、雑誌論文①、②参照)。すなわち、各地の観測者が、気象観測資料と同時に博物学資料も収集する点が特徴的であるにもかかわらず、先行研究では看過されてきた（後述５、雑誌論文③参照)。この過程において、ジョセフ・ヘンリーの博物館学的側面を検討した。知識の普及より増大を重視するヘンリーは、博物館には消極的だったとされるが、実際は、アイヌ等文化人類学的コレクションの収集に積極的であった。また、議会向けのパフォーマンスの色彩が指摘されるものの、公衆に対する講演を数多く企画した。

(3) スミソニアン気象事業は、共通の計画に基づいて気象日誌をつけ、毎月報告書を郵便で提出する、ボランティア観測者の大規模な体系だったが、ボランティアの実際の活動が詳細に検討されたことはなかった。ボランティア観測者の属性について整理・検討を加えるとともに、女性観測者たちの実際の活動の一部を明らかにした（後述５、雑誌論文④参照)。

(4) 明治初期の御雇米国人の博物館学思想を検討した。開拓使ベンジャミン・S・ライマン Benjamin S. Lyman が残した膨大な書簡の中から、1874 年 5 月 22 日付 B.S.ライマン発 H.マンロー宛書簡（アメリカ哲学協会所蔵ベンジャミン・スミス・ライマン文書）の中にある「北海道地質調査助手への一般的指示」General Instructions to the Assistants of the Geological Survey of Hokkaido を検討した。この一般的指示には、北海道で地質調査を行う助手への指示が 1 から 11 まで列挙されており、8 以降は、北海道調査において鉱物標本のみならずアイヌの人類学的資

料・言語を収集するよう指示する内容となっている。ライマンは、地質調査の過程で、各種複数の標本収集、標本交換といった、今日の博物館学的知識をも助手に与えた（後述５、雑誌論文⑦参照）。文部省学監ダヴィッド・モルレーのほか、伊藤圭介、田中不二麿、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの博物館学思想も検討した（後述５、図書⑦参照）。

(5) スミソニアン協会の広報部の歴史（とりわけサイエンス・コミュニケーションの歴史）に関する研究を行った。主に、1979 年から 1993 年までスミソニアン協会広報部に所属したマデレーン・ジェイコブス Madeleine Jacobs (1946-)の広報活動を取り上げた。
①1979 年、ジェイコブスは、広報部次長兼主任サイエンス・ライターとしてスミソニアン協会に入り、スミソニアン・ニュース・サービスを立ち上げたほか、3 つの定期刊行物の出版の監修をした。1986 年から 1987 年の部長代行を経て、1987 年から 1993 年まで広報部部長として協会全体の主席広報官を務めた。彼女は、ヒスパニックをはじめとする多様な観衆を博物館に惹きつけることに関心を持つようになり、彼女の就任時代に「スミソニアンはみんなのためにある」というスローガンが作られた。1993 年、そのアウトリーチ活動が評価され、彼女はスミソニアン協会特別サービス金賞を受賞している。彼女が立ち上げたスミソニアン・ニュース・サービスを整理・検討した（後述５、学会発表⑩、⑪参照）。
②スミソニアン協会『研究報告』に関する「アルビン・ローゼンフェルド広報部長のための覚書」（1979 年 11 月 29 日）を主に用い、ジェイコブスの科学コミュニケーションについての考え方を検討した。ジェイコブスは、「科学コミュニケーションの範囲の 1 極は、[専門領域の]仲間同士のコミュニケーションである。もう一方の極では、科学/技術に関する情報は、新聞、雑誌、テレビ、ラジオをとおして、一般大衆に伝えられる」とした上で、「仲間同士のコミュニケーションおよびマスメディア・コミュニケーションの２極の間には大きな乖離が存在する」と指摘する。ジェイコブスは、「特定の聴衆への科学の伝達は、多くの形態を取りうる。どの形態を用いるかの選択は、伝達するプロジェクトの範囲、届ける特定の聴衆、および運ぶメッセージによる。幅広い聴衆に届くように、大抵、方法は組み合わされ、強化的・相乗的に用いられる。方法は補完的だが重複しないものとして考慮されうる」と結論付ける。
　こうして、ジェイコブスは、マスメディアを対象とするサイエンス・ニュース・サービスと教育水準の高い聴衆を対象とする『研究報告』との差異化を図った（後述５、学会発表⑦参照）。

(6) スミソニアン協会において、「科学技術とジェンダー」に関する研究は、国立歴史技術博物館（1964～）/国立アメリカ歴史博物館（1980～）、レメルソン発明および革新研究センター（1995～）、国立自然史博物館（1910～）、国立航空宇宙博物館（1976～）、スミソニアン協会アーカイブス（1846～）に属する科学技術史研究者が行ってきている。これまで「科学技術とジェンダー」を巡り、だれが、何を、また、どのようにドキュメンテーションしてきたのかを整理・検討した。方法論は、文献調査およびインタビューによる（後述５、雑誌論文⑥、⑧参照）。

(7) 日本の博物館学史に関し、本草学/本草会とジェンダーとの関わりを検討した。当時有名な詩人・画家であった江馬細香（1787-1861）著「癖石一塊」が、西尾市岩瀬文庫所蔵『読書室物産会目録』巻之三十五に所収されている。細香の甥、江馬活堂（四代春齢）は、1841（天保 12）年 3 月 21 日、京都の山本亡羊に入門し、1844（弘化元）年から文久 3（1863）年にかけて、計 6 回読書室物産会に出品している。活堂は、1848（嘉永元）年 6 月、患者の腹から出た癖石を出品したが、出品に向けて癖石の説明を記したのは細香である。1847（弘化 4）年冬のことであった。細香の説明には、時、患者の住所、年齢、性別、病症、診断、処方、その後の経過、石の形状、病気の原因・考察などが書かれている。「癖石一塊」完成までの一連の作業において、細香は文人サークルの仲間である医者・神田柳渓から評言を受けたが、その評言をとおして、語学的知識のみならず、科学的・医学的知識をも伝達されていた（後述５、雑誌論文⑤参照）。

(8)『アメリカ文化事典』第 8 章科学技術「博物館」を担当し、関連資料収集および執筆を行った（後述５、図書①参照）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 8 件）
①財部香枝、明治初期の米国海軍病院（横浜）における気象観測、（日本科学史学会東海支部）東海の科学史、第 12 号、2017、126-130、査読無
②財部香枝、明治初期日本に導入されたスミソニアン気象観測法、科学史研究、No.276、2016、287-301、査読無
③財部香枝、スミソニアン気象プロジェクトと博物学研究との関わり、地質学史懇話会会報、第 44 号、2015、10-17、査読無
④財部香枝、スミソニアン協会アーカイブス所蔵気象観測資料の紹介：ジョン・チャッペルスミスを中心に、（日本科学史学会東海支部）東海の科学史、第 11 号、2015、87-94、査読無
⑤財部香枝、江馬細香稿「癖石一塊」につい

て、伊藤圭介日記、第20集、2014、277-287、査読無
⑥財部香枝、スミソニアン協会における科学技術史研究に関する文献エッセイ：「科学技術における女性」を中心に、（日本科学史学会東海支部）東海の科学史、第10号、2013、43-51、査読無
⑦財部香枝、B.S.ライマンのアイヌ資料収集に関する小論：「北海道地質調査助手への一般的指示」を中心に、北海道開拓記念館研究紀要、第41号、2013、147-152、査読無
⑧財部香枝、科学博物館における技術革新研究およびその成果の活用について：スミソニアン協会の事例から、日本の技術史をみる眼第31回　講演報告資料集、2013、24-39、査読無

〔学会発表〕（計15件）
① Kae Takarabe, Smithsonian Female Meteorological Observers: A History of Women in United States Meteorology, 25th International Congress of History of Science and Technology, 2017.7.24 Praia Vermelha Campus of UFRJ, Rio de Janeiro (Brazil)
②財部香枝、創造的な関係：江馬細香と神田柳渓、おおがき先賢大学、2017.1.22、奥の細道むすびの地記念館（岐阜県・大垣市）
③財部香枝、スミソニアン気象事業を支えた観測者について、日本科学史学会第63回年会、2016.5.28、工学院大学（東京都・新宿区）
④財部香枝、スミソニアン協会への誘い、リトルワールドカレッジ（マスターコース）、2015.5.17、野外民族博物館リトルワールド（愛知県・犬山市）
⑤財部香枝、スミソニアン気象観測プロジェクトと博物学研究との関わり、地質学史懇話会、2014.12.23、北とぴあ（東京都・北区）
⑥財部香枝、江馬細香稿「癖石一塊」について、『伊藤圭介日記』（第20集）出版記念会、2014.11.23、名古屋市東山植物園（愛知県・名古屋市）
⑦財部香枝、マデレーン・ジェイコブスとスミソニアン協会(2)、全日本博物館学会第40回研究大会、2014.6.28、明治大学（東京都・千代田区）
⑧財部香枝、明治初年にわが国に導入されたスミソニアン気象観測法(2)、日本科学史学会第61回年会、2014.5.24、酪農学園大学（北海道・江別市）
⑨Kae Takarabe, Scientific Practice in Japan: A Case Study of EMA Saiko (1787-1861), 2013 HSS (History of Science Society) Annual Meeting, 2013.11.22, Westin Boston Waterfront Hotel, Boston (USA)
⑩Kae Takarabe, Smithsonian News Service: Focusing on science writer Madeleine Jacobs, 24th International Congress of History of Science, Technology and Medicine, 2013.7.23, University of Manchester, Manchester (England)
⑪財部香枝、マデレーン・ジェイコブスとスミソニアン協会、全日本博物館学会第39回研究大会、2013.6.30、明治大学（東京都・千代田区）
⑫財部香枝、科学博物館における技術革新研究およびその成果の活用について：スミソニアン協会の事例から、シンポジウム「日本の技術史をみる眼」　第31回「技術史を学ぶことと今後の技術革新とは」、2013.3.24、名城大学名駅サテライト（愛知県・名古屋市）
⑬財部香枝、スミソニアン協会における「科学技術とジェンダー」、全日本博物館学会第38回研究大会、2012.6.16、明治大学（東京都・千代田区）
⑭財部香枝、スミソニアン協会における科学技術史研究：ジェンダーの視点から、日本科学史学会第59回年会、2012.5.27、三重大学（三重県・津市）
⑮日本科学史学会共同企画（含財部香枝）、日本科学史学会創立70周年記念シンポジウム２（一般公開）「四日市公害裁判と研究者・市民－判決後40年の節目に」、日本科学史学会第59回年会、2012.5.27、三重大学（三重県・津市）

〔図書〕（計7件）
①財部香枝（編集委員長・松本悠子、橋本毅彦、遠藤泰生）、アメリカ文化事典（第8章科学技術「博物館」担当）、丸善出版、2017、印刷中
②圭介文書研究会（含財部香枝）編、伊藤圭介日記、第22集、名古屋市東山植物園、2016、305
③圭介文書研究会（含財部香枝）編、伊藤圭介日記、第21集、名古屋市東山植物園、2015、295
④圭介文書研究会（含財部香枝）編、伊藤圭介日記、第20集、名古屋市東山植物園、2014、329
⑤圭介文書研究会（含財部香枝）編、伊藤圭介日記、第19集、名古屋市東山植物園、2014、283
⑥圭介文書研究会（含財部香枝）編、伊藤圭介日記、第18集、名古屋市東山植物園、2012、313
⑦財部香枝、（青木豊・矢島國雄編）博物館学人物史、下（「伊藤圭介」35-42、「ダヴィッド・モルレー」55-64、「フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト」25-33、「田中不二麿」79-86担当）、雄山閣、2012、314

６．研究組織
(1)研究代表者
財部　香枝（TAKARABE, Kae）
中部大学・国際関係学部・教授
研究者番号：00421256